

こぞと インタビュー

今号のテーマは「人権について考える」としました。人権を考えるなら、暮らしの場から、と考えています。暮らしの場、すなわち「となり近所」。

そのことを考えるヒントとして、最首悟さんにお話を伺いました。

最首悟さん（和光大学名誉教授、横浜市旭区在住）といえば、神奈川新聞で公開された津久井やまゆり園事件の植松聖死刑囚との手紙のやり取りをはじめ、「いのち論」を語る識者として知られている方です。

重度の障がいをもつ四女の星子さんと暮らし、ご自宅に「地域活動支援センター（精神障害者作業所型）むくどりの家」を併設されて地域に暮らす最首さんは、自治会の会長でもあります。かつて全共闘の闘士でもあり、「いのち論」の思想家でもある最首さんが、自治会活動に何を見ているかを伺いました。



▲「むくどりの家」にて さいしゅ・さとる氏 「明日もまた今日のごとく」はご著書の書名

明日もまた今日のごとく生きる たんとと生きる心の拠り所としての地域

いわゆる左翼活動家や学識者が自治会活動にかかわるということはあまり聞かないように思うのですが、最首先生と自治会活動とのかかわりは？——

1550世帯ほどある白根町内会の会長をして6年目に入ります。12自治会が集まる白根地区自治会連合会では副会長。一戸建てが多い地区で、元警察官という役員が多く、昼夜のパトロールがメインの活動と言えます。私はといえばみんなに支えられながら「笑顔」活動(?)をしています。

「むくどりの家」のような場所は、「まちなか」にあることが必要だと思うし、防波堤にもなりたい、と思って自治会活動をしている面もあります。精神障がい者による事件など起ころうものなら、それはもう、となり近所の空気が一変するのを肌で感じますからね。

1970年代から80年代にかけて、社会は人間関係を断つ方向に進みました。「新人類」が生まれた頃で、「あっしには関りないことでござんす」とか「カラスの勝手でしょ」と関係を断つことからみんなが委縮してきました。「総活躍」なんて言われて「自分探し」に内向し、自己決定から自己責任、自助という具合になっていく。だから、人間関係の回復の主舞台が地域ではないでしょうか。

自治会は「すみません」で成立する

自治会活動ではどのようなことを大切にされるのでしょうか？ 例えば、民主主義の砦のような見方もありますが——

自治会の基本は「未決裁＝済みません＝すみません」ですね。町内会で多数決はできません。全会一致が基本。責任者は“OKマン”です。すっかり意

味が汚れてしまったけれど、それこそ「忖度」。町内会のあやふやさは、「何もしない町内会」だったり「何もできない町内会」だったりですが、個人というものが定着していない日本では、絆につながるのではないかと。切ったと思っても切れない、という「となり近所」。変革や革新はできないけれど、人と人の拠り所となる「となり近所」。

球面主義で関係性をむすぶ

国や政治がグズグズになっているからこそ、全くあたらしい関係性の視座で自治会を見るのが大切なのでしょうか？——

「球面主義」ではないかと思うのです。対等でも平等でもなく。球面に立つと、いたるところが中心なわけですね。上下関係がない。あるとすれば頼り頼られる相互関係。赤ん坊は意識としては誰にも頼らない。みんなが世話すると赤ん坊が場の中心になる。目的などはなく、だから希望や絶望がある。もともと日本は自他未分の関係性のなかにひとがあって、その二者性ともいべき「あなたとわたし」の関係を自治会が実証してくれそうな気がしています。いま、「婦人会」という言葉は死語になりつつありますが、自治会を土台とする女性の活躍はそれかもしれないし、期待できますよね。そのとき、男の言葉ではない社会論、組織論が課題になるでしょうか。

人と人の関係性が断たれた場のままでは、自治会は上意下達機関になります。人と人の拠り所となる場として、たんとと生きる場として残るのが自治会、地域な気がします。



同じ時代 同じ地域に暮らすという奇跡。

「むくどりの家」を併設する横浜市・旭区最首氏自宅（2021年4月4日撮影）

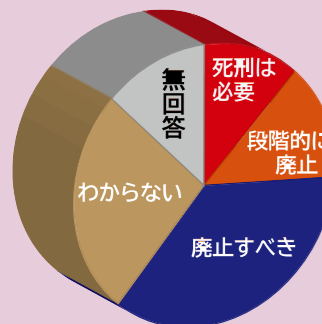
紙 上 カ フ エ



©「教諭師」members



世界各国で次々と廃止が決まる中、いまだ存続するわが国の死刑制度。この特異なシステムの下で、ひたすら対話を繰り返す死刑囚とひとりの男の姿を描いた映画『教諭師』。その鑑賞後、みなさんの残してくれた気持ちを集計してみました。当日の参加者はのべ145名。アンケートの回答者は57名でした。



死刑制度についてこう思う

- 未回答 / この世の中が良くなって悪がなくなることを望みます。(市外 70代)
- 廃止すべき / どんな罪人も生まれつき殺人者ではない。(市外 50代)
- わからない / 殺していい命は一つもないとわかっていても、いつ突発的に何かのはずみでボタンのかけちがいで殺してしまったり、殺されたりということは起こり得るとおもいます。人を殺した人は死刑で当然だという考えと、殺すつもりがなくても結果として殺してしまった場合もあると思うと、いちがいに殺人犯は死刑とは思いません。でも被害者の家族になったら、犯人は死刑にしてほしいと思うでしょう。(中央区 60代)
- わからない / 難しいです。(南区 70代)
- 段階的に / 子どもも大人も教育が必要(南区 70代)
- 廃止すべき / 代わりに終身刑を。(南区 50代)
- わからない / この映画を観てわからなくなりました。(南区 50代)
- 無回答 / 死刑は必要だとずっと思ってきたが考えてしまう。作品中の高宮の言葉がとても引っかかる。(南区 70代)
- 無回答 / 本当のところよくわかりません。人が人を殺していいのか？合法的な手段として。そこには自分ではまだ答えが出ないです。(南区 70代)
- 無回答 / 1~20人殺せば犯罪、万~億を殺せば「凱旋、勝利！」殺人者は死刑という矛盾一私には理解できず一宗教、僧侶はどうしているのですか？(南区 70代)

このまに暮らすわたしたちは、死刑といえば、あの津久井やまゆり園事件に思いを馳せずにいられません。植松聖死刑囚は、周囲の説得に耳を貸さずに上告することなく死刑囚となりました。それが果たして罰と言えるのか。ちなみに、1面の最首さんは、植松死刑囚と文通を重ね、死刑確定後は届けることもできなくなっていますが、なお、発信を続け、そのすべてが神奈川新聞のwebサイト「カナロコ」で公開されています。どうぞ、あわせてチェックください、最首悟さんの手紙「序列をこえた社会に向けて」<https://www.kanaloco.jp/news/social/entry-184588.html> です。

▶フェンス越しの交流を記録するお母さんのメモと涼くんが書いた気持ちを表わす文字がならぶ

知らないこと 知ろうとしないことで 誰かが傷ついている

『教諭師』を見て死刑について考えたこと

「ハイトスピーチ」とは、在日外国人に対して「〇〇人を殺せ」「〇〇人は日本から出て行け」といった表現で、在日外国人の尊厳を傷つけ、恐怖を与える差別に基づく言葉による暴力のことです。2019年4月の相模原市議会選挙に、醜悪なハイトスピーチを繰り返してきた、「在特会」の桜井誠元会長を党首とする「日本第一党」が3人の候補者を擁立しました。私たちは「反差別相模原市民ネットワーク」を立ち上げて、「落選運動」をすると同時に、「ハイトスピーチ規制」の条例制定を目指すことになりました。「落選運動」では「日本第一党の〇〇候補に投票しないでください」と記したリーフレットを3万枚個別配布し、同じ文言の「横断幕」を作って、日本第一党の候補者の演説の前に立ちました。彼らは「選挙妨害」だといきり立ちましたが、私たちは市民にアピールしているだけで妨害はしていません。そんな運動が効果あったのか、日本第一党の候補者は全員落選しました。

反差別相模原市民ネットワーク 事務局長 田中俊策(南区在住)

ハイトスピーチをなくすために

2019年の12月に、川崎市で、「画期的」なハイトスピーチに罰則規定を設けた条例が成立し、私たちは「相模原でも川崎モデルの条例制定」を目指すことになりました。「幸運」にも、19年の選挙で当選した本村市長が相模原市でも「川崎に負けない罰則付きの条例の制定」を明言したことも私たちの運動を後押しすることになりました。「落選運動」「条例制定」と明確な目標があることが、活動の励みになっています。条例制定ならば、「連続学習会」、行政への要請、市議会へのロビー活動などやりたいことはいくらでもあります。そのような運動の成果が、昨年10月から取り組んだ「署名」活動にも現れました。「川崎モデルの条例制定」を相模原市長に求める要請署名は、期待

マイリティを下にみるという優性思想といつも向き合う必要を自分自身にも感じます。私は誰もがマイリティ要素を持っていると思っています。マイリティであってもマジョリティ側にも移行しやすい弱さを抱えて、たたかわないとならない。対等な権利がそれぞれの人間関係に在ることを願います。

朝鮮学校支援者 50代女性 (愛川町在住)

家族から地域へ「医療的ケア児」の存在が地域を豊かにする

2012年11月生まれの佐野涼将(すずまぎ)さん、愛称“涼(すず)くん”は、早期胎盤剥離から脳にダメージを受け、人工呼吸器と胃ろうという医療的ケアを必要とするお子さんとなりました。弟の誕生を心待ちにしていた当時小2のお姉ちゃんは、涼くんと初めて対面したとき、ショックを受けてしまったそうです。母親の佐野綾乃さんも涼くんを見る世間の目が怖かったといえます。一方、父親の佐野政幸さん。学校行事には欠かさず参観して子どもたちを慈しんできた政幸さんにとって、3人目に誕生した涼くんは、お姉ちゃん、お兄ちゃんと変わらぬ可愛い“うちの子”でした。友人宅でのバーベキューに涼くんを連れ出したとき、友人の子どもたちは自然に受け入れてくれました。このバーベキュー体験は、お姉ちゃんがお友だちに涼くんを会わせる抵抗がなくなるきっかけになりました。



▼教室に入れない涼くんは、昇降口で朝の挨拶をする。校庭に隣接する公園へ。クラスの子もたちとフェンス越しに交流。

涼くんとコミュニケーションに学ぶ



涼くんにどうしてあげたらいいかをお姉ちゃん、お兄ちゃんにも訊くという綾乃さんは、母親でありながら、自分がいちばん涼くんを受け入れるのが遅かったかもしれない、といえます。涼くんはこう言っている、感じていると涼くんとコミュニケーションをとる家族の姿に、そ



▼登校班の子どもたちとご両親とともに涼くんの登校風景(2021年3月撮影)



かたや、1年生当初、涼くんを遠巻きにしていた子どもたちとの距離はだんだん縮まりました。2年生のある日、涼くんを初めて見ていぶかし気にする転校生にクラスメートの女の子が説明してくれたり、運動会のダンスの振付だって涼くんに教えてくれました。その後、運動会に参加できない現実を知った涼くんは両耳に涙がたまるほど泣いたそうです。それらの現実を見通していいはずがない。——それは、涼くんの周りにできる子どもたち自身の学びの波紋をなくすことに思えます。出会った子どもたちは変わらぬ友情を見せてくれているのに。涼くんとご両親は、地域小学校に教室に入れないのに登校をつづけています。それは、とてもまばゆい登校の姿に思えてならないのです。

涼くんが広げる学びの波紋

お姉ちゃん、お兄ちゃんが通った地域の学校に行くのが当たり前。責任を負いきれないという学校や看護師さんの立場も理解できるから、支援学校から地域の小学校への転校を目標に体験登校を重ね、そこで生まれる課題を洗い出して、ひとつひとつ、一人ひとり細かな話し合いを重ねて解決していこうとしていました。しかし、2年生から通学する予定だった地域の小学校なのに、計画は白紙になりました。「教育的云々」という言葉で押しやられて、何をどう解決していいか、ということがわからなくなったまま、2年生の1年間は、教室に入れないまま登校班とともに自主通学しながら、昇降口より先に入ることを禁じられて、クラスメートと下駄箱前で挨拶する毎日でした。

医療的ケア児の存在を知ることから

「医療的ケア児」と呼ばれる子どもたちの存在に、ようやく社会が応えるときを迎えつつあります。川崎で地域の公立小学校への通学を認められなかったお子さんが、世田谷区に転居することで公立小学校に迎えられました。相模原市には、佐野さんも加わっている医療的ケア児の家族会があり、それぞれの困りごとを共有したり、把握しようとしています。国会でも「医療的ケア児支援法」の制定を求める動きがあります。知らないこと、知ろうとしないこと、遠ざけることがどれほど、子どもたちとご家族を傷つけているかを、わたしたちも気づくべきときを迎えています。

すべての集会をバリアフリーに♡

津久井やまゆり園事件を考え続ける会主催の集い
(2020年11月29日 会場・杜のホールはしもと)

にて発言の見える化にチャレンジ



わたしたち参加しちやいました
バリアフリー型動画配信プラットフォーム事業

シアター フォー オール

THEATRE for ALL

<https://theatreforall.net/>



▲音声ガイドの録音風景
緑区清新の音楽スタジオにて

「ここ de シネマ」はまちづくりのためのコミュニティ・シアターとして開催してきました。

だから、原則、バリアフリー上映。多様な隣人たちと共に暮らしていくなら当たり前と考え、バリアフリー仕様でない映画を観たいときには、自分たちで字幕・音声ガイドを制作してきました。そうして、少しずつノウハウを獲得してきました。折しも、コロナ禍のなかネット配信の環境も進んできたなか、だれでも、いつでも、どこからでも。ひと

劇団・地点『三人姉妹』字幕・音声ガイド完成試写会
(2021年3月16日 会場・相模女子大学グリーンホール)

「劇場」としてスタートした『THEATRE for ALL』のコンテンツ制作に参加することにつながった次第です。私たちが取組んだのは京都を拠点とする劇団「地点」の『三人姉妹』。チャーホフ原作の演劇で斬新な演出が海外でも評判の



▼シアターフォーオールのコンテンツ一覧より抜粋

作品です。さらに、わたしたちのまちで試写会を持つことができ、少なからず刺激的な鑑賞体験を提供できました。このような機会を得られたことに感謝し、障がいの有無にこだわらず、多様な鑑賞体験にチャレンジすることをオススメするものです！

NPO法人ここずっとは
市民相談窓口を開いています。相談は☎042-745-0676へ。



ここでずっとくらしたいからバリアフリー-2題

当日は、すべての発言について文字化してスクリーンに映し出し、情報の共有を即時にはかるという試みにチャレンジしました。写真のスクリーンにスライドが映っていますが、その隣に見えている文字列がそれです。これは、UDトークというアプリを使って、文字に直していきます。音声認識で自動的に文字に変わりますが、誤変換を避けることはできないので、オペレーターが表記の修正をかけていきます。左側で手元をのぞき込み、スマホやタブレットを操作している一群がオペレーターたちです。この日は総勢9名の方がオペレーターとしてボランティア参加してくれました。修正された文字が黄色く写っているのが写真からわかるでしょうか？UDトークのアプリを使う利点として、

集会の終了と同時に、集会の発言がそのまま文字となって残ります。いわゆるテープ起こしをしなくても、集いの見える化によって、記録がそのまま残るのは、障がい当事者のためだけでなく、市民にとって大きな蓄積になるでしょう。また、専門用語など話の内容を理解していればこそできる修正も多々ありますので、その知識を豊かにしていくことも重要となります。ボランティア参加の方からは、オペレーター技術を高めると同時に社会参加の人間力を高める刺激をもらえたとの声もあがりました。

市民主催の集いであればこそ、IT化によって、手が届くようになった様々な手段を使ってバリアフリー化を実現したいものです。市民自ら実現することで、私たちは、さらに多くの隣人と出会うことができると考えています。万全とは言えませんが、集いの見える化を求めるみなさんと共に歩んでいきたいと思っています。どうぞ、私どもNPOにお気軽にご相談ください。

Information

ここ de シネマ第17回は特別回

松元ヒロさんに会いに行く！

2021年10月16日(土)
PM2:00開始

会場:相模女子大学グリーンホール
多目的ホール

入場料 おひとり 2000円
中学生以下と介護ヘルパーの方は無料



撮影 橘連二

ここずっとの字幕・音声ガイド制作収入をこのまちに還元。TVで会えない芸人No.1の松元ヒロさんをお招きします。ヒロさんの話芸で、みんなで元気になろう！

『フリー情報紙 こそずたうん』No.19

【発行日】2021年5月

【発行者】NPO法人ここずっと

〒252-0303 相模大野9-6-18
ここずたうん編集室



ご意見、投稿、記者志望者は
ここずたうん編集室へ

【TEL】042-745-0676 【FAX】042-742-0447

【E-mail】info@cocozutto.jp

※ここずたうんはまちづくりを考える【NPO法人ここずっと】が発行しています。